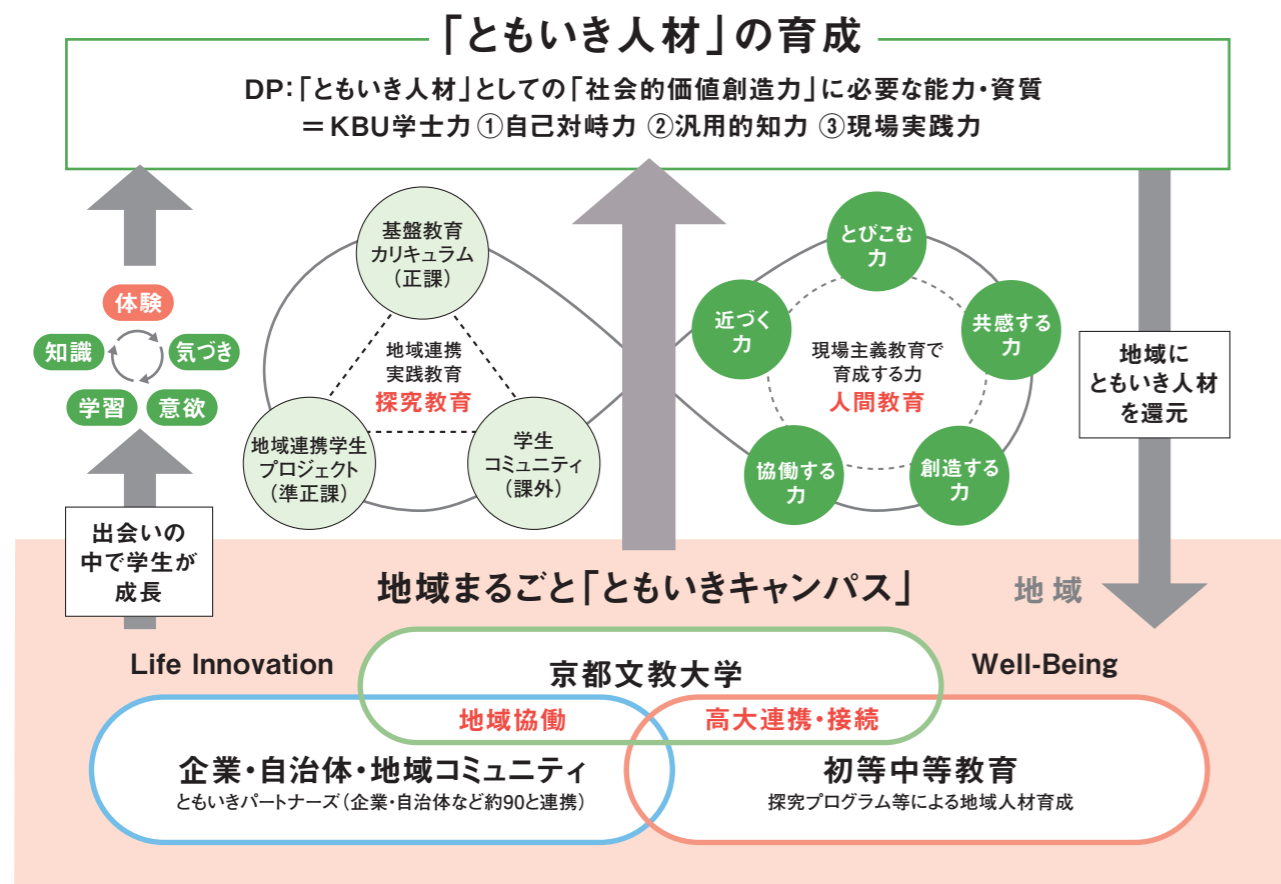




キャンパス/京都府宇治市 学生数/1,881人(府内出身学生比率約60%)
 建学の理念/「四弘誓願」
 学部/総合社会、臨床心理、こども教育
 大学院/臨床心理学

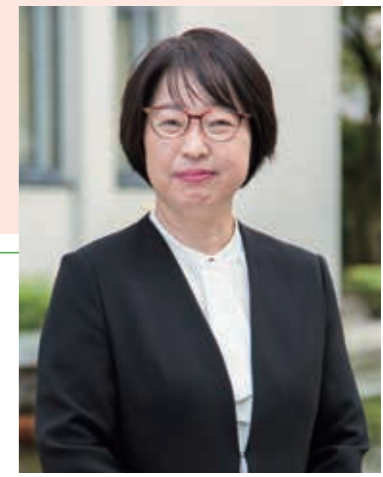
地域人材を育てる「実践型教育モデル」



地域と一体化し課題解決に臨む 地域まるごとキャンパスの実現

京都文教大学

地域と大学が共生する、「ともいきキャンパス」づくりを掲げる京都文教大学。常に地域に頼られるようになった背景には個々の課題への組織的な対応がある。



学長 森 正美

もりまさみ ●1997年筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科単位取得退学。同年京都文教大学人間学部専任講師。2013年より同大学総合社会学部教授。2014年地域協働研究教育センター長、2019年副学長を歴任し、2022年から現職。

CASE STUDY

課題に丁寧に寄り添い 地域に頼られるように

京都府は出生率が全国でもワースト5に入る低さで、地域の少子化が課題です。府内のほとんどの大学が京都市内に位置する中、南部に本拠を置き、自己と他者の双方を幸せにできる「ともいき人材」の育成をめざす大学として、この地域で果たすべき役割は小さくありません。

本学は現場主義教育を重視しています。地域は社会課題を学べる「現場」の最たるものという意識で、地域連携を推進してきました。その成果が評価され、2007年には特色G.P.に採択されました。それを契機に、地域で取り組むPBLやインターンシップを組み込んだカリキュラムを整備。宇治市と伏見区には、地域住民や企業と大学が交流するサテライト

キャンパスも開設しました。その後、地域ニーズに応え、子育て支援室を開設し、宇治市高齢者アカデミーを開始。^{*2}大学COC事業、COC+事業の採択により、産官学民協働の実践研究を充実させるなど、地域と大学が共に社会課題や人材育成に臨む「ともいきキャンパス」づくりを進めています。

地域連携を加速できた最も大きな要因は、2006年に設置したフィールドリサーチオフィス(FRO)の存在です。当初1名から現在8名になった職員が、行政や企業、住民からの相談窓口、連携事業の企画運営を教職協働で多角的に担います。FROのメンバーは相談者のニーズを親身に受け止め、教員だけでなく学外の関係者同士もつなぐ、地域連携のハブの役割を大切にしています。

地域のパートナーの力を 教育力として学生に還元

地域貢献を通して、本学の教育理念に共感する企業、自治体、高校などが増えています。そうした方々と地域パートナーとして連携し、2010年から正課・準正課・課外と3つの側面から、実社会の課題を通して学びを深める実践型教育を展開しています。

正課の一つとして、1年次の必修科目「地域入門」を開講しています。入学生の最初の戸惑いは、なぜ「地域」の学修をするのかということ。実際に地域課題に取り組んでいる自治体、企業、団体、先輩学生、卒業生ゲストも招き、学問と社会の結び付きや、地域との関わり方を学ぶ科目です。「地域連携学生プロジェクト」は学生の自主活動ですが、教員がアドバイザーに付く準正課としています。2024年度は宇治茶の魅力を発信する「宇治☆茶レンジャー」など、6つのプロジェクトが稼働中。学生は、高齢者、認知症、障がい当事者、町内会・自治会、小中高生、NPO、企業、自治体など、地域の多様な人々と共に、社会課題に取り組み、成長していきます。

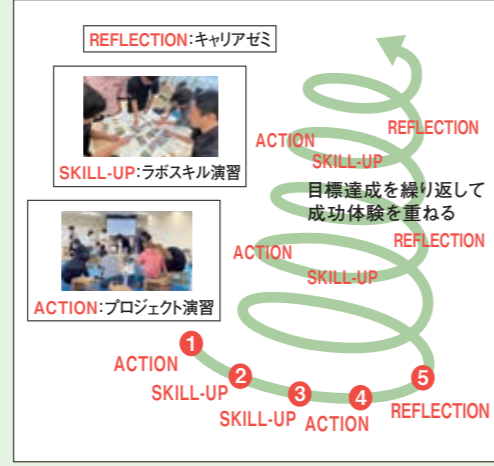
2024年度には、現場主義教育のノウハウを生かし、実践社会学科を新設しました。地域に還元できる人材の領域を広げるべく、2025年度には総合社会学科にスポーツ・健康コースと食マネジメントコースを設置。さらに、生化学部(仮称)の設置を構想中です。今後はイノベーションが求められる、理系人材の大都市への流出が増えることでしょう。本学は地域を支える「ともいき人材」の育成に力を入れていきます。

注目 現場主義教育を洗練させた新学科 実践社会学科のコンセプトとは

2024年度に新設された実践社会学科は、同大学の現場主義教育を体現した学科だ。学生は2年次にPBLである「プロジェクト演習」を履修。その後、食・農・健康、ものづくり振興など、5つのカテゴリーから関心のあるプロジェクトを選択。例えば農業のプロジェクトなら農家といった地域のさまざまな主体と連携し、課題解決に向けて行動する。「プロジェクト演習」や正課授業での学びは「キャリアゼミ」で定期的に振り返り、不足しているスキルがあれば「ラボスキル演習」で磨く。そしてまた「プロジェクト演習」に向かうというサイクルで、知識の習得や資格取得にとどまらない社会実践力を磨く。過去の連携を通じて、地域との垣根をなくした同大学だからこそ開設できる学科といえる。

入試にも特色がある。学科の学びを体験し、その場で自己推薦書を書く「総合型選抜自己評価型方式」、大学生との相互インタビューや座談会など進路を考えるとところからスタートする「総合型選抜進路探求方式」など、受験生の意欲を高め、個性が発揮できる入試を設けている。

学びのスパイラルを連続させ、 計画的に社会実践力を伸ばす



*1 特色ある大学教育支援プログラム *2 地(知)の拠点整備事業 *3 地(知)の拠点大学による地方創生推進事業